第七号

ねこみの

猫蓑通信

平成四年
（１９９２）
四月十五日発行
〔年四回発行〕

発行人　東 明雅
発行所　柏市つくしが丘２－２－１２東 明雅 方
Ｔｅｌ．０４７１－７５－１１９２

「の」の字が残った

東　明雅

連句会に出ても初心の間は、付けても付けても採用して貰えず、内心、残念・畜生と思いながら、表面はさり気なく一座された苦い経験は、多かれ少なかれ、きっと一度位は味わわれたことだと思う。

このような場合、捌き手も困るのであって、何とかして一句でもこの人の句を頂戴しようと努力するのだが、当人が馴れない悲しさ、焦れば焦るほど、飛んでもない句ばかり付けて出される。他の熟達した人はうまい句を次から次へ、洪水のように出して来る。こうなると、捌き手は全く手をあげるより外はない。

こんな場合、捌き手の取る方法は二つある。一つは熟達した人が出された句を頂戴して、その初心者の人の名で記録する方法である。これは捌き手に取っても、貰う当人に取っても不本意であろうが、座の文学の特性から許される一つの便法である。もう一つは、初心の人の句を徹底的に、原型を止めぬまでに添削し、あるいは作りかえて、とに角その人の句として出すという方法である。この場合、せめてその中に「の」の字が一つ位は残るだろうというところから、その初心者の嘆きをおもしろく、とに角、私の句は「の」の字が残ったというのである。

この言葉は、私が信大連句会に居た時、芦丈先生から習ったもので、東京に来て猫蓑会を作ってからも、しばしば用いているから、多くの皆さんにはお馴染であろう。

芦丈先生の連句雑誌「山襖」第九号にはこの言葉の起源がちゃんと記録されている。

『鳳羽・浅水・菊外の三吟の百韻である。無論、鳳羽の捌きだ、菊外が下手だから、叱られ叱られ満尾した。この百韻の校合に朱を加へ加へして、真赤になって朱を加へる余地がないので、又浄書して朱を加へること三度、菊外云ふ俺の句は「の」の字が残った位のものである。この百韻が雨山編の連句総覧に載って居るが立派な一巻である』

すこし註を加えるならば、鳳羽（一八四二～一九一九）は本名森山茂。明治時代随一の大巨匠であった。浅水は峰岸浅水、菊外は菊守園二世として立机した猪瓜菊外、気の毒であるが、彼の名はこの一語によって、後世まで語り草にされることだろう。

ここで最も留意しなければならぬのは、私どもはこの言葉を一座の捌きの上で専ら使っていたのであるが、捌きの場合はもちろんのこと、本来は一巻が完成してから、それを検討する校合の段階で用いられた言葉であるということである。

一巻が満尾しても、朱を加え、三度まで加えるということは、いかに古人がその作品を大切にし、完璧を期したかということのあかしである。作れば一応検討し、校合はするものの、すぐ放り出してしまう私などは本当に反省すべき言葉である。

付句の独立性と詩魂

大畑　健治

「猿蓑」四歌仙の付句には、に・て・連用形で止めた句が一四０句中一八句しかない。他は、終止形・連体形・名詞（体言）で止めた句である。ただ一つ、「木曽の酢茎に春もくれつゝ」のように、「つゝ」で止めた例がある。これは和歌の余情的な文末表現の一つである。和歌の文末表現には、終止形・命令形・終助詞の他に、連体形や体言で余情的に言い切る止め方がある。和歌に準じて考えると、一四０句中一二二句が言い切りの独立体であることになる。

独立体であるからには、主体性（個性）があるはずである。一見平凡な「又も大事の鮓を取出す」「何を見るにも露ばかり也」の句にも、「又も」「ばかり」という詩情を発動することばがあり、これを除いたらつまらない句になってしまう。写生を主張した子規の「鶏頭の十四五本もありぬべし」の句も、「も・べし」の主観があって句となるのである。この主観が作品の詩情を生み出す。二句間に匂い立つ第三の詩情も、この主観から生まれる。「うそつきに自慢いはせて遊ぶらん／又も大事の鮓を取出す」において、前句の「らん」や付句の「又も」は作者の主観の現れで、これが句に揺れをもたらし、第三の詩情を匂い立たせる。思いやりと思いやりが美しい人情の世界を生み出すのと同じである。前句の作者の主観と付句の作者の主観とが互いに共振し、共鳴し合って増幅される。だから、主観の揺れがない「晴天の有明月の朝ぼらけ／湖水の秋の比良のはつ霜」のような景気（人情なし）の付句を詠むことは難しい、と連歌書はいう。逆にいえば、作者の主観が込められていれば、丈の低い平凡な付句にも詩魂が込められることになる。

文末を言い切っていない、独立体でない句に対する付句はすべて言い切りで、二句一章のように前句の詩情を完結させる。

「さま〳〵に品かはりたる恋をして／浮世の果は皆小町なり」「ものおもひけふは忘れて休む日に／迎せはしき殿よりの文」の如きである。

連句の付句は個性的で、その主観の揺れが詩魂となり、協調的な詩情を生み出す。

祝　喜寿　手賀沼張行記

下鉢　清子

明雅先生が喜寿を迎えられた。もう喜寿になられたのかという驚きと、まだ、たかだか喜寿ではないかとの相反する思いが満つるのは、此処に己れ自身の年齢が重なって来るのを否めないからである。

初めてお逢いしたのは江戸川区医師会の俳句会「鵜の会」の席上であった。先生は古稀前であられたが、以後柏連句会・朝日カルチャー教室・関口芭蕉庵等々、多くの会でご指導を賜った。「もう喜寿」の思いの中には、連句に賭ける先生の只管なる姿が、年齢を忘れさせていたからである。改めてお世話になった月日の長さに思い至る。「まだ喜寿」には、理論と実作に於ける連句界の、掛け替えの無い存在と、連句大いに興る近頃故に、まだ喜寿の安堵が加わる。

扨、何はともあれ人生の節目、「喜」に因んで猫蓑会として喜びを共にしたいと昨年から話し合いが持たれて来たが、賑々しいことが大の嫌いの先生がなかなかご承知にならない。究極の案が記念の張行ということになり、先生のご承諾も得られ当番は地元の柏支部が引受けることとなった。東京勢には少し遠方であるが、手賀沼の辺りフィッシングセンターを会場として、三月二十九日に先生ご夫妻にお出願うことになったのである。信州大学の同僚であられ、現在筑波大学教授の加藤慶二先生、愛弟子の富山大学助教授の二村文人先生もお出で下さり、当日の出席者は四十四名の顔ぶれとなった。会場までの先生ご夫妻の送迎は慶二先生、車が手賀沼湖畔に着くと、早出の人々は既に沼のほとりで句材探しに余念が無い。晴れ男の明雅先生であられるからと安心していたが、今年の春先は滅法に雨が多く小雨に煙る沼をご披露することになったのは、要するに係の私の不徳かと。

十二時より中川哲氏のご挨拶により開会、続いて慶二先生よりご祝辞を頂く。大学紛争の折、文学の灯を消してはならないと率先して解決に努力をされたお話、余生は連句の道へと考えられた美事なる転身の様子など、様々なエピソードを混えての慶二先生のお話を皆胸熱くして拝聴した。続いては往年の友杉内徒司氏が、先生の著書についての期待を述べられる。ここで猫蓑会から先生には花束を、奥様には真珠のブローチを贈らせて頂いたが、新宗匠羅浮亭正江・桃径庵和子両氏より受けられたご夫妻は誠に照れ臭そう。乾杯の音頭は文人先生、平成三年度のA・C・C終了時の写真に触れて、ポケットに一寸手を入れた講義のポーズが、学生を前にしてのそれと少しも変らないと懐かしそうに話されつつ、先生のご長寿と猫蓑会の発展の為に杯を挙げる。昼食は鰻重と鯉こく。誰やらがこの鰻と鯉こくは手賀沼産であろうかなどと話しておられたが、手賀沼の汚れは日本一で此処の魚は残念ながら臭くて食べられないそうだ。

十二時半より記念の二十韻、十六時十分より夫々満尾となった八編の作品の披講となったが、どの作品も変化球の多い付句の面白さに嘆声しきり、中には今日の真珠を早速ネタに、「真珠贈って釣り上げた妻」の付句あり、楽しませて頂いた一日であった。一昨年先生がご上梓になられた連句集は『新炭俵』、あとがきに「芭蕉の軽みに迫るべく」と書かれたが、その先生の夢の実現に連衆の一人として共に歩むことの出来る幸せをしみじみと噛みしめた。帰りの車が出発の頃は雨脚もやや強くなったが、沼にはまだ白鳥が残っていて、見飽きぬ眺めであった。行き届かない係りでありましたがご参加の方々に心よりお礼申し上げる。

陰の主役「文台」とその作者

新しき文臺花に使ひ初め

明雅先生のこの句は、昭和六十二年四月に亀戸天神に奉納した一巻で詠まれた。古い会員の方はご存知だろうが、このときから、猫蓑会の年二回の正式俳諧では「左澤（あてらざわ）」と銘のある文台が使われている。

珍しい読み方をする銘は、文台の製作者、五十嵐譲介さんに因むもの。「左澤」は、最上川と月布川の合流点にある山形県の古い町で、五十嵐さんの出身地だそうだ。

五十嵐さんは、信大連句会時代から明雅先生の教えを受けた方で、現在は柏連句会の常連の一人。職業は大工でも指物師でもなく、国語教師である。文台製作のような「物作り」を始めたのは、十二年前、木更津の高専に赴任したのがきっかけという。

「高専は、技術者を養成する学校だから、技術について見聞きすることが多い。とらえどころがない国語などと違って、形がある技術の世界に興味をもって」、木工に親しむようになった。本で独修したり木工教室に通って、椅子、小箪笥と製作。やがて「家でも造ろう」と、三年かけて六畳の書斎も独力で完成させたというから本格派だ。

ただの趣味を超えたその実力を明雅先生に見込まれての文台製作――。材料は、伝統に従い、軽くて強い桐を使用。製作のための資料は、蕪村が書き残した「二見形文台」の記録と、明雅先生所持の村尾花文台を参考にしている。製作上、とくにむずかしかったところは、と聞くと……。

「素人が作るときは、材料をそろえるのが大変です。木場で乾燥した桐を手に入れたら、あとは三日くらいで出来ました。ちょっと考えたのは、仕口と言って垂直に交差するところの作り方。江戸指物の技術は、用途にふさわしい強度を確保しながら、外には工作部分を見せない。仕口は、指物師がそれぞれ工夫するところなんです」

鏡板と脚部に、それぞれ台形の凹部と凸部を作り、ぴしっとはめ込む。凹凸が深すぎると板が割れるし、浅いと強度が不足する。ちょうどよいところを見つけるのには、勘と経験が要るのだろう。

出来上がった左澤文台には、蕪村の「二見形文台」と同じく、二見ケ浦の景が描かれた。筆は名和浩酉伯。同じ景の描かれた文台を、西行法師も芭蕉も使ったと伝えられる。所作鮮やかな執筆の「文台捌き」が、伝統を伝える正式俳諧の華なら、文台は陰の主役というところだろう。

文台製作後の五十嵐さんは、茶室造りに取り組んでいる。四年前から学校の文化祭行事で学生達と建て始め、土台から木工、左官、屋根……と全部手がけ、三年目の昨年は茶会を開くまでに。今年はさらに、炉、襖、障子も作る予定とか。

「いろいろなことに興味があり、首を突っ込む質です。連句をやっているのも、広く浅くが許される世界だからかなー」

手仕事を通じて交流の出来た職人達の生活や人柄にも心を惹かれるそうで、いつか連句にもそういう人達を誘い込み、新しい世界を広げたいと夢を語ってくださった。

（文・岩井啓子）

§ 猫蓑会員作品集 §

『連句 猫蓑作品集 Ⅱ』が出来上がりました。どうぞお買い求めください。（¥1700）

〒二七七　柏市加賀2－12－11

梅田 利子 方

（0471－72－8119）

広告と連句

電通会連句部　逸見　篤

電通連句部は、（一応世界最大の）広告代理店である株式会社電通のコピーライターが中心になって集まり、昭和五十八年に発足しました。社内外の部員を合わせても十二～三名程度の小さな寄り合いではありますが、発足以来、東明雅先生からの御指導を賜り、毎月第三木曜日、本社近くの「南寮」（電通の厚生施設）にて句作に励んでおります。

連衆は皆、何らかのかたちで広告制作に携わっている人間ばかりですから、元々人目をひく言葉づくりには慣れているはずなのですが、月に一度の句会の席では、季寄せ、辞書を片手に四苦八苦。珍妙奇妙な反故を出しては、東先生にカッカと笑われつつ、二十韻一巻の制作に、午後六時からはじめて、十時近くまでかかることも毎度のことになってしまっています。結局、広告制作の経験はあまり句作の役には立っていないようです。

しかし、連句を広告制作のヒントにすることは可能なのではないかしら。単に広告コピー案出の訓練としてではなく、連句そのものを広告表現の手法にしてしまうなんてこともできそうな気がします。広告代理店の人間は、どいつもこいつも広告主のお金で自分の趣味心を満たそうとする連中ばかりなのですから、いつそれが実現しておかしくありません。

筆者は連句をはじめてから未だ六年（しかも欠席することも多い）の若輩者ではありますが、連句広告についてのちょっとした企画を持っております。当部の他の諸先輩に話すと（彼らは広告マンとしても先輩にあたりますから）笑われそうなので、この場をお借りしてご披露させていただきたいと思います。

その企画というのは、現状において何の脈絡もなく垂れ流しになっている様々なテレビ広告を、それぞれ短句長句に見立て、連句の式目に則ったかたちで放送することにより、一連の広告を連句にしてしまおうというものです。

テレビ広告の多くは、商品周辺の生活の一断面を表現していますから、全く異なる商品の広告を向合わせても、「物付」「心付」ばかりでなく「うつり・響き・匂ひ」といった付味の工夫が楽しめるに違いありません。

これは手軽な（？）映像連句の試みとも言えます。少なくとも趣味のビデオ編集レベルでやってみる価値はありそうです。（新聞や雑誌の広告でもできそうですが、実現するとすれば、東先生に捌きをお願いしなければ！）

ところで、最近、電通制作によるＪＲ東日本のテレビ広告が話題になりました。小泉今日子がクイズを出題し、十五秒後（他の広告の後）に、その答えが出されるというやつです。

この広告は、間に挟まれた広告が目立たなくなるという理由から、業界ではむしろ問題となりましたが、連句の観点からも「打越」に相当する悪例と言えるでしょう。

さてさて愚にもつかぬ事を書き連ねてしまいましたが、「文台引き下ろせば、すなわち反故」の気安さで連句の席を楽しむのが当電通連句部の身上であり、何事にも軽い気持ちで取り組めることが広告屋の器量でもあります。反故の中からも皆様のお目に止めていただける作品がでないとも限りませんが、この拙文を機会に、東先生門下の端くれに当部があることをお心留めいただけることになれば幸いです。

朝練　午後勉

朝日カルチャーセンターの連句の時間が第二・四水曜日から第二・四土曜日に移り、午前十時から正午までになりました。

「われら遠距離族といたしましては、ちょっと不安もございましたが、私は勤めておりますので朝は苦になりません。電車も土曜日は空いていて、それでいて通勤快速もありますので、まるで私たちのためのサービスのようですよ。」（久保田庸子）

「いままでですと冬は帰りが暗くなって怖かったのですが、これからは午後もちょっと博物館に寄ったり展覧会をのぞいたり、都会の探訪ができると喜んでいますわ。」（桑原美津）

「そうそう、東京は知らないところがいっぱいですから、吟行もできるわ。」（渡辺秋景）

「私は都内ですが、小田急も空いていて楽でした。土曜日ですから食堂も空いていて、お友達とご一緒に午前はお勉強、午後の楽しみもできまして、よかったと思っております。」（須田智恵）

「私はちょっと時間帯の違うもうひとつのお稽古もしていますので、一度帰ります。一休みして出かけられるから楽です。」（神谷安子）

朝練　午後勉。皆様充実した土曜日をお持ちになったようですね。（文責・式田）

～連句協会十周年記念～

『現代連句集』が発行されました。申し込みは左記へ。二千円（送料共）

〒２３０　横浜市鶴見区生麦３－１６－６
新盛油槽船株式会社内　連句協会事務局（℡０４５－５０１－４９０７）
口座　東京　９－９００２４　連句協会

◇　猫蓑発展基金ご協力感謝いたします。

一口　倉本路子　小林千雪　真田光子
水島ますみ　村田冨美
二口　下坂元子
三口　中島啓世
（敬称略）

◇　発展基金は随時受け付けております。よろしくお願いいたします。

振替口座　東京３－５５０３４８
猫蓑同人会

◇　年四回の猫蓑会の正式俳諧、および連句興行には、初めての方もどうぞ気楽にご参加ください。捌きがお世話いたします。一、四、七、十月に開かれております。

＊連句とさかな＊

鯛のかぶと

杉江　杉亭

鯛の季節である。鯛で美味しいのは頭（通称かぶと）で筆者の好みはその酒蒸しである。

先ず顎肉に箸を付ける。引締まった肉の味が何ともいはれない。次に眼玉を周囲のゼラチンと一緒に頬張る。脂の乗った融けるような味。眼玉の不透明な部分を喰べ終ると後に透明な玉が残る。かくして背と腹の部分に箸が進み、それにつれて酒の方も調子を上げるといふ次第。

〈蛇足〉　鯛の姿に似た骨を見付たら「鯛の鯛」といはれる　貴重品。乞秘蔵。

質問コーナー

東　明雅

【Q】 お祝いの時、あるいは忌日に連句興行をする場合、注意しなければならないことがありましたらお教えください。

（小野　シズ）

【A】 正式俳諧を興行する場合は、猫蓑で毎年四月に行なっている亀戸天神藤祭の行事と、十月に行なっている芭蕉忌の場合とを比較すれば、その違いが歴然でしょう。たとえば、懐紙もお祝いの時は紅白の水引だし、仏事は青白です。お祝いの時の端作りは「俳諧之連歌ですが、仏事は之の字を除いて「俳諧連歌」と書きます。その外、献花・供香にも、それぞれのやり方が違っているのは御承知の通りです。

正式俳諧ほど改まったものでなくても、亡き人の忌日に皆が集まって、追善興行をする場合があります。そのような場合には発句には故人の句を用いて、脇起りの一巻を作るのが普通ですが、そうでない場合も、あまり俗にくだけた発句ではなく、長高い不易の句を発句にすることが求められます。

追善俳諧の心得については「連句辞典」に記載があるように、「迷う」・「暗い」・「落ちる」・「罪」・「科」・「もゆる」・「苦しむ」などの字を用いることが禁ぜられますが、これはみな亡き人の冥福を祈り、成仏を願う気持の表現に外なりません。また、「鬼」・「幽霊」などの妖怪の類、そして、「犬」などの畜生の類も嫌われますが、これは仏教の輪廻の思想の表われでありましょう。

もちろん、これらは一種の迷信でしょうが、その外に、連句（俳諧）の祖が、例の歌垣（嬬歌・男女が歌を詠みかわす行事）にあるとされ、言語には霊妙な働きがあるという言魂の信仰が、今日まで残っておりますので、現代連句でも割合に忠実にこの禁忌が守られております。

同様に、たとえば新築のお祝いの連句興行の場では、「燃ゆる」・「焼くる」など「火」の噂、航海・船中の興行では、「かえる」・「沈む」・「波」・「風」などの語を出してはならぬという慣習も、古くから残っております。

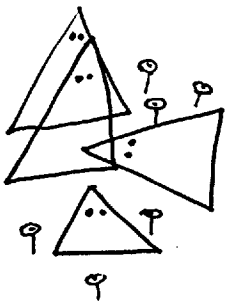
「醒睡笑」という江戸時代初期の笑話本には、当時流行した連歌や俳諧に関する話が多く載せられておりますが、その中に、

ある移徙（転居）の連歌の席で、

春の日は軒端につきてまはるらん

という句を出したので、宗匠は、日は火に通じて不吉だから「消せ」と命ずる。執筆が「数度の直しで、これ以上は消されぬ」というと、この作者「とにかく消しなさい。またすぐつけるから」と、付け火にも通ずる失言を犯してしまった、とありますが、この話を見ても、このような禁忌のことが一般的によく知られていたことが分ります。

その他、「五体不具の噂、一座に差合ふ事思ひめぐらすべし」（三冊子）とあるのは一般的な注意ですが、追善・祝賀などの折には、一層深い心懸けが必要であります。



俳諧南北忌（2）

杉内　徒司

南北のおくつきどころ石蕗の花　宇野　信夫

嘴太鴉なきし短日　田中　宏

番傘に姿かくして過るらん　草間　時彦

拙者もとより銭にうるさし　林　空花

書割の月を仰ぎて名科白　河原崎国太郎

流しの音締め消えて虫の音　岡本　文弥

因果なる女のひそと秋すだれ　千代　有三

おどろおどろと太鼓鳴るべし　横溝　正史

木場の果て筏浮べる隠亡堀　細田　隆善

湯漬啖ってぽてふりに出る　荒川　爛柯人

墓石を欠いてはツキをとりもどし　東　明雅

繃帯まきし首の細さよ　千田　佳代

麗人とたたへられしは昔なり　入江　たか子

夕顔棚は行水の月　高藤　馬山人

雄阿寒も雌阿寒岳も西日中　真鍋　天魚

春の夢みる漂へる湖　わだ　としお

三幕目は花を散らして幕を引く　戸板　康二

バスの立場も陽炎の中　杉内　徒司

（昭和五十五年九月末）

河原崎国太郎の次に新内のお師匠さんが付けられたら、南北もさぞ喜んでくれるだろうときめこんで、浅草のお住居に岡本文弥師を訪ねた。

国文学者川島つゆ氏の自殺を報じた新聞記事の文弥師の追悼談に、川島さんに連句を教へてもらったとあったので、師が連句実作をされている事を知っていた。付句を頂いた後に出た「芸流し人生流し」（中公文庫）には連句に関する一節があり、連句作品ものっている。

戦前の歌集（題は忘れた）を読んで以来文弥師の人生歴を少しは知っていたが、作家の小島政二郎が京華中学時代の同級生ということをごく最近知った。（タウン誌「うえの」四月号）

さてその次の千代有三の本名は鈴木幸夫、早大英文科教授。千代有三の名で推理小説を書き、海外の推理小説、評論の翻訳を上梓されているので、同氏の発案によって横溝正史につけてもらったのだ。

編集部より

○ お預りした原稿の最後の一字打ち終ってあと、一杯のコーヒーの味は格別。次号はどなたが来てくださるのだろうかと、つかの間楽しい想像に遊ぶ。

○ 面白い話題ありましたらどうぞお寄せください。

○ 風薫る五月、もうすぐです。

季刊「ねこみの」通信　第七号
発行者　猫蓑連句会
印刷所　アトリエ・NeKo